

# ビュテル・デュモンの奢侈論

—消費の自由の観念をめぐる—

米 田 昇 平

## 序

マンデヴィル以来の奢侈擁護論は消費欲求の経済的意義に着目することで、伝統的な奢侈批判に反論したが、そこには人間の世俗的な社会生活にかかわる価値規範の転換が反映していることは言うまでもない。人間の世俗的な幸福は物質的な富の享受による人為的欲求の充足にあり、社会的結合の目的もそこにある、そして文明の進歩や社会の繁栄を導く原動力もまたそうしたより高い水準の消費欲求の充足を求める人間の功利的動機であると考えられたのである。それは17世紀以来の価値規範の世俗化の流れに理論的裏付けを与えることで、この流れを一挙に時代の本流に変えうるインパクトをさえ持っていた。それゆえ、執拗に繰り返される宗教的、道徳的な反批判は、多かれ少なかれこのような価値規範の転換に対する異議申し立てでもあった。他方、そのような転換を基本的に承認した上で、消費欲求の意義を一意的に強調する奢侈擁護論を、資本あるいは「節約」の観点から批判する経済学的な奢侈批判の新たな流れが生じる。そこではインダストリーを持続的に維持するために、むしろ消費欲求を抑制し、消費ファンドを資本蓄積のファンドに転化することが求められた。18世紀半ば以降、奢侈擁護論は引き続き宗教的、道徳的な奢侈批判と、新たな経済学的な奢侈批判の両面からの批判に応えることを課題としたのである。

このような状況にあって、奢侈擁護論の流れを集約し、それに最も直截な表現を与えたのがビュテル・デュモン (G. M. Butel-Dumont, 1725-?) であった<sup>(1)</sup>。今日ほとんど知られざるこの人物はその長大な『奢侈論』 (*Théorie du Luxe*, 2vols, 1771) において、世俗化への価値規範の転換に功利主義的根拠を与えることで伝統的な宗教的、道徳的批判に反論し、さらに重農主義の資本理論の批判的検討を通じて経済学的な奢侈批判に応えている。その上で彼は奢侈的欲求・消費のほとんど無制限の自由を求めているのである。本稿の目的は、18世紀の奢侈擁護論の系譜の一つの集約点に位置すると思われるビュテル・デュモンの「消費の自由」の観念を吟味することで、奢侈擁護論の担った歴史的、経済学的意義を改めて検証することにある。

(注) (1) ビュテル・デュモンについて、グルネ門下の一人として、グルネによるチャイルド『新交易論』の仏訳 (*Traité sur le commerce et sur les avantages qui résultent de la réduction de l'intérêt de l'argent par Josiah Child...*, 1754) に共訳者として加わったほか、ケアリの翻訳 (*Essai sur l'état du commerce d'Angleterre*, 1755) を手がけた事実などが知られている (G. Schelle, *Vincint de Gournay*, 1897 [1984], pp. 235-6 および津田内匠「1750年代のフランス経済学の動き」『Study Series』一橋大学社会科学古典資料センター, No.1, 1982年を参照)。彼の『奢侈論』に関しては、スペングラーが人口論の観点から簡単な紹介を行っているにすぎない (J. J. Spengler, *French Predecessors of Malthus*, 1965, pp. 160-1)。

## 1. 奢侈と市民的道德

ビュテル・デュモンの奢侈擁護論の基礎をなすのは、快樂と苦痛の原理に基づく功利主義的幸福観である。彼はいう。幸福は不幸と同じように、感覚が受け取る印象と魂が感覚とは無関係に抱く感情とによって構成されるが、感覚は完全に物理的原因によって規定されるから感官に与える効果には制約があるのに対して、魂の感情は大部分が想像力から生じるから、

そこにはいかなる限界もない。それゆえ豊富の中で感覚の楽しみを最大限に享受しながら不幸だと感じる人もいれば、自分が著しく貧しいことを自覚しながらも幸福だと感じる人もいる。このことから人は幸不幸の原因は「主観的判断」にあると考えたが、しかし彼はこのような魂の感情は不確かな幻想に左右され、「どのような幻想も、どのような魂の性質も物理的な不幸を幸福に変えることはできない」(I, p. 80) から、「主観的判断が引き起こす苦痛は人が夢や錯乱の興奮状態で感じる精神の苦悩に分類すべきであり、…訳もなく嘆き悲しむ子供の涙に関心を寄せる必要がないのと同じように、そのようなものに関心を向ける必要はない」とする (I, pp. 85-6)。こうしてビュテル・デュモンは想像力に左右される魂の感情という不確かな幸不幸の基準を退け、唯一確かなその基準を快楽と苦痛の感覚に求める。「幸福は快適な感覚にある。そして最高の幸福は次第に強くなるこの同じ感覚の中断されることのない持続性であろう。生活を洗練するのはこれらの感覚のみである」。したがって人間の幸福は物質的基礎に裏付けられた感覚的享樂の持続にあり、それによる生活の洗練にある。彼は温度計のモデルを用いて、幸不幸の諸段階の中心に心身の健康および苦痛と快楽が何もない状態を置いてこれをゼロとし、ゼロ以下に苦痛と苦悩を、ゼロ以上に享樂と快楽を置いて各人の幸不幸の度合いを示すことができるとしている (I, pp. 92-3)。彼は幸福の基準を、飢えの恐怖や貧困からの解放をもたらしう物質的富の享受による快楽の感覚に求め、この意味でその基準を経済的厚生に限定したと言える。さらにこのことは国民的レベルにも当てはまる。「国民はそれを構成する諸個人が…より多くの便宜や満足や享樂を持つに依じて、一言で言えば苦痛をより少なく、享樂をより多く持つに依じて幸福である」(I, pp. 98-9) から、政治の目的は、より幸福になるための物質的手段をより多く人々の手に入れさせることでなければならないのである。

以上のような快楽と苦痛の原理に基づいて、彼は奢侈の原義や伝統的観念を再検討し、奢侈の観念につきまとうあらゆる曖昧さを排除すべく、次

のように奢侈を規定する。すなわち「必要を越えるものはそれ自体、絶対的に奢侈」(I, p. 107)であり、何であれ快楽や快適さの感覚を増大し苦痛や不便の感覚を軽減するもの、要するに人間の幸福の増進に資する洗練はすべて奢侈である。こうして、彼は時と所の相対的な状況に応じて同じものが必需品、便宜品、快適品、奢侈品などと呼び分けられる必要や奢侈の観念の相対性を排除し、「有用性、便宜、快適さは同じ源泉を持つ、すなわちそれは感覚である」(I, p. 110)と、快苦原理の一点から奢侈の観念を絶対的に規定する。通常、奢侈と区別される有用性、便宜、快適さはいずれも快楽の感覚を獲得し、あるいは辛い感覚を免れるために求められるから、その目的は同じく洗練された感覚的享樂の享受にあり、この意味で奢侈という同じジャンルに属するそれぞれのパリエーションにすぎない。この同じ目的の枠内で状況に応じてそれぞれが相対的な特質を表すにすぎないのである。感覚的享樂を増大し苦痛や不便を軽減するあらゆる工夫や洗練は奢侈であるから、厳密に言えば、人間の自己保存にとって最低限必要なもの(「狭義の必要」)以外のもの、あるいは原始の状態をわずかも改善しうる洗練はすべて奢侈に分類されねばならないと彼はいう。絶対的な必要を越える余分な享樂の享受は、それぞれの特性に応じてそれがもたらす享樂の程度に差があるにしても、しかし何であれ個々人の厚生を高め、したがって国民の厚生を高める点では違いはないのである。それゆえ「最も有力で最も幸福な国民は最も多くの奢侈を持つ国民であり、最も脆弱で最も不幸な国民は奢侈を持つことが最も少ない国民である」(I, p. 143)。以上がビュテル・デュモンのいう「唯一正確な」奢侈の規定である。ここではフォルボネのように奢侈か必要かの不毛な二者択一を退けるために「便宜」の一領域を設けることも、また奢侈を擁護した他のほとんどすべての論者のように道徳的、社会的に有害な奢侈と有益な奢侈とを区別し、前者を過度の洗練として非難することも、まったく無意味である。感覚的享樂や生活の便宜を増すかぎり、どのような奢侈も同じく有効であり、「技芸によるあらゆる享樂は本質的に等しく奢侈に属する、ある

いは同じ種類、同じ性格を持ち、もともと同じ動機を持っており、快適な感覚を与え苦痛の感覚を免れさせるというどれも同じ一般の効果を発揮する」(II, p. 19) ののである。

さらに彼はこのような余分な享樂を求める「奢侈の嗜好は人間の本質」であり、「人間に与えられている活動的な知性や完成能力は絶対的必要の狭い領域に閉じこめることを人間に許さない」(I, p. 48) とする。快樂の感覚を増大し苦痛や不便の感覚を軽減するような洗練を求めること、言い換えれば「自己の生活状態の改善」(I, p. 46) を求めることは「なにもものを屈服させることのできない」(II, p. 79) 人間の本源的欲求であり、人間の知性はもっぱらこの目的のために発揮されるのである。人間が社会を形成する目的もまたこれであるから、社会形成の動因も人々の奢侈の嗜好である。人々の行う経済活動の目的も同じであるから、この意味で商業とインダストリーの目的もまた奢侈である(「奢侈がなければ商業とインダストリーにはどのような目的があるだろうか」II, p. 81)。したがって、人々が奢侈の嗜好によってこの本源的欲求を駆り立てるほど、知性は活発に機能し、無限に拡大する人為的欲求に応じて技芸の進歩と商業やインダストリーの拡大がもたらされる。大国の繁栄をもたらす原因は人間の労働とその労働を駆り立てる人々の競争心であり、この労働と競争心が維持される条件は「労働を通じて満足のいく収入が得られる期待」(I, p. 34)、すなわちこの収入によって自然的欲求を越える様々な人為的欲求を満たすことができるという期待であり、この期待に応える技芸の全面開花であるが、このような期待は奢侈への本源的欲求を通じて自己実現されていくのである。ビュテル・デュモンはこの展開を、ヒュームやフォルボネなどと同様に、奢侈的欲求に牽引される社会発展のプロセスとして次のように描いている。人間の定住とともに穀物の栽培や家畜の飼育等の新たな技芸が生まれ、この技芸によって農産物余剰が発生し、農工分離の物質的基礎が提供される。すなわちこれらの農産物余剰は産業労働を可能にし、新たな技芸に基づく新たな奢侈をもたらすが、今度はこの新たな

に増大した奢侈が農業者の生産意欲を高め、余剰の生産を増大する、こうして「耕作は拡大し、技芸は刺激される」(I, p. 54)。このような展開は「他の人々よりも活動的で知的な、あるいはより状況に恵まれた若干の人々」の莫大な富によって先導されるが、しかし「かれらの幸福はかれらだけのものではない」。かれらの巨額の支出のおかげで「改良された技芸は生産方法、道具、機械、あらゆる種類の発明をもたらすことで国家の力を著しく高める。なぜなら、奢侈は無数の多様な職業の協働によって満たされるからそのような利益はおのずから必要品や快適品にも及ぶからである」(I, pp. 55-6)。奢侈的欲求に牽引されて、技芸の発達を伴いつつ農業とインダストリーの相互的發展が導かれていくのである。

こうしてビュテル・デュモンにおける奢侈の効用もまた明らかである。奢侈的嗜好は繁栄を導く労働と競争心のインセンティブでありモチベーションであるとともに、その嗜好は消費需要に転化してそのような労働と競争心に機会を与える。すなわち享受とともに消滅する享楽は人を絶えざる勤労に駆り立てるから、「奢侈の嗜好は(労働の)最も有効な原動力」(I, p. 31)であるとともに、一方で奢侈は「何百万もの消費者を生み出すことで、生産物の所有者の手元に生活資料を越えてなお残る生産物に販路を提供」し、これらの「有用な消費者」の消費需要によって「耕作の拡張」が可能となる(II, p. 123)。また財産の所有者がそれをもっぱら蓄えるときには、「彼の財産は彼以外の人にとっては無である」(II, p. 52)が、もし彼がみずからの享楽のために支出すれば、彼に享楽を提供する大勢の人々が彼の財産に与ることができる。このとき技芸の実践に向かう大勢の職人たちはお互いの競争心によってみずからの勤労を駆り立て、様々な創意工夫を生み出すが、これとともに人間の精神は成長し、諸効果の結合により様々な社会的利益が生じる。さらに奢侈は職人たちの競争心を刺激するにとどまらない。奢侈的嗜好は所有者の所有欲を刺激し、収入を増加するための手段の追求に彼を駆り立てて、「このような刺激がなければ何の欲求も感じずにみずからの富に安住し、みずからの身体と所有物を有

効に利用することをなおざりにするであろう大所有者を、嗜眠状態から抜け出させ、しばしば用意周到で学識豊かで有能な人間に変える」(Ⅱ, p. 54)。

このように奢侈的欲求は勤労の誘因としての主体的機能と、消費需要に転じて労働と生産を規定する客体的機能の二重の経済的機能を一体のものとして発揮することで、技芸の発達をもたらし国民の富裕と幸福を増進するのである。奢侈の効用に関するこのような見方が、マンデヴィル、ムロン、フォルボネなどの奢侈擁護の基本的論拠を踏襲するものであることは言うまでもない。ただし、マンデヴィルやフォルボネが経済社会における分業と交換のシステムを消費循環の側面から捉え、このシステムを支える動因を前者が富者の、後者が勤労大衆の消費支出に求めたのに対して、ビュテル・デュモンにおいては、富者の消費と大衆の消費のそれぞれの経済的機能が十分に区別されて論じられてはいないし、なにより消費循環の側面からこの機能を捉える視点は希薄である。こうして、彼は「個々人が彼らの利用や消費のために必要を越えて求める物が有用であるか余分であるかは、一国民の繁栄の観点からこれらのあらゆる対象が予想させる支出の効果を評価することが問題であるときには、なんら考慮する必要はない」(Ⅰ, pp. 63-4)として、あらゆる支出は労働と生産を刺激するから国家に有益であるとする<sup>(1)</sup>。また奢侈の効用はこのような経済的機能にとどまらない。生活状態の改善を求める意欲は、人間の知性を高め、眠っていた才能を目覚めさせるばかりか、美德は貧困においてよりも富裕の状態においてよりよく現れるのであるから、奢侈的享樂が富裕の原動力であるとすれば、奢侈は美德の源泉であり、奢侈的嗜好の普及とともに習俗は穏やかとなり、人々は社会的で穏やかな生活を送るようになる(Ⅱ, p. 111)。このように彼はヒュームやフォルボネなどと同様に、奢侈的享樂の願望→富裕→美德の連鎖に基づいて、奢侈と徳あるいは富と徳の合一を説いている(Ⅱ, p. 167)。したがって奢侈を奨励することは国家の利益であり、立法者は「労働者の勤労と消費者の気紛れに最も自由な飛躍を与えねばなら

ない」(I, p. 32)。彼は執拗な奢侈批判の声に抗して、断固として「消費の自由」を唱えるのである。

ビュテル・デュモンは以上のような奢侈理解に基づいて、伝統的な様々な奢侈批判に逐一反論している。奢侈取締法の歴史とともに古くから、奢侈は習俗を腐敗させ、魂を墮落させ、美德を損なうことで国家を破滅に導くとされてきたが、このような道徳的な奢侈批判に対して、彼は、1. いかなる歴史的事実もこのような批判を容認しない、2. 奢侈的な国民も質朴な国民もどちらであれ、「羨望、嫉妬、野心、虚栄心、貪欲を生じさせる魂の感情」は国民を無秩序にさらすのであって、大きな対象がないときには小さな対象に向かうにすぎず、質朴な国民の方がより有徳であるとはいえない、3. 奢侈的嗜好は虚栄心を満たすための顕示的欲求に動かされるときにのみ、感覚的享楽の喜びとは無関係に限界を越えて貪欲を燃え立たせるのであって、このような動機に導かれる顕示的消費は「奢侈ではない、それは奢侈を偽るものである」、そしてこのような虚栄心や貪欲は国民の生活様式がどうであれ不平等が存在するところではどこでも等しく影響力を行使するから、享楽を制限する国民がそれだけ過度の貪欲や拝金主義の卑しさを逃れうるわけではない、それゆえ欲求の制限によって習俗が改められるとか、辛い暮らしを送る国民の方が平穏な暮らしを送る国民よりも有徳であるなどということはありません、4. 奢侈的嗜好は不断に相互に伝わりあうから、交渉を持つ相手の気に入るように努める必要性が自己抑制に慣れさせる、こうして「富裕な国でその富裕を享受する人々は穏やかで節度があり、大きな犯罪からは程遠いのである」などと応じている(II, pp. 138-49)<sup>(2)</sup>。

奢侈が国民の道徳的退廃をもたらし、これによる習俗の腐敗が国家の破滅をもたらすとする批判はまったくの的外れであり、腐敗の原因を見誤っていると彼はいう。拝金主義に陥れて人間から公共精神を奪い人間を金銭のために隷属状態に陥れる原因は、奢侈それ自体にあるのではなく、「人民と君主の権利が共通の利益にとって間違っ結びついた統治の構成にあ



る」(I, pp. 163-4)。またときとして人が顕示的な動機などから資力を越えた浪費にさえ身を任すような転倒が生じるのも、官職が金銭で売買され、法の下での平等が確保されずに一部の富者が特別待遇を得るような政治的構成の欠陥にその原因がある。そのような国では人々は虚栄心などの「奢侈とはまったく異なる動機によって」動かされるのである<sup>(3)</sup>。したがって彼はいう、「奢侈は国家の繁栄を助長するが、しかしそれは統治の構成が奢侈の有用な効果を変質させないかぎりでのことである」(I, p. 162)。さらに彼は個人の道徳的観点と国家の政治的観点を区別したムロンにならって、たとえ個人的な悪癖によって能力を越える支出によりその個人が破滅したとしても、政治的観点からはなんの問題もないとし、「これらの支出はなんであれ国家の内部で行われ、いわば左手から右手に渡るのであって、政治体に損失をもたらすものではない」と述べている。奢侈批判が陥っている過ちのおもな原因はこの二つの観点を混同したところにあり、誰がみても破廉恥なほどの顕示的な浪費といえども、「国家に有害ではない、それは枯渇した血液を国家に与えるものである」し、また「財産の不平等な分配を是正する」効果を発揮しうるのである。それにそもそも統治の構成が良好であるかぎり、国民の多数が自己の必要をおろそかにし、能力を越えるこのような顕示的消費に身を任せて自己破滅に陥るようなことはありえない。なぜなら「人間の感覚を触発するものに対しては理性が常に人間を統御する、少なくとも人間の体質は長く誤ったままでいることを許さない」からである（「レースを手に入れるために履き物をなしですます人などいないであろう」）。したがって人間は自己保存にかかわる「必要」から始まる「不動の秩序」において感覚的享樂のレベルを高めていくにすぎず、理性的な自己抑制が働くから「消費の自由」が全体の秩序を転倒するような事態は起こり得ないのである (II, pp. 42-9)。

以上のようにビュテル・デュモンは道徳的な奢侈批判を退けるが、しかし「徳の諸原理は国民の間に絶対に必要である。悪徳は国民を破滅へと導く」(II, p. 155) ことに疑いの余地はない。道徳的な奢侈批判の問題は、そ

の批判が厳格な宗教的徳を拠り所にしているところにあると彼はみる。宗教的徳は「行為それ自体を社会とのあらゆる関係とは無関係にもっぱら完全さの規律との関係でのみ判断し、そこからのいかなる乖離も許さない」(Ⅱ, p. 151) が、しかし「国家に結合する人間の目的は修道院に集まる人間の目的とは異なっている」(Ⅱ, p. 156)。人々の関心は現世における世俗的な束の間の幸福であるから、この意味で人々をより幸福にする習俗ほどより良好であり、徳に関して「判断基準とすべき真の試金石」はこの現世的幸福の観点である。彼には道徳的観点から奢侈一般を批判すること自体がナンセンスな本末転倒であり、社会的結合の目的は奢侈的享樂の享受にあるから、この目的に抵触するどのような厳格な規範的基準も自己矛盾というべきであり、むしろ人々の行為を律する規範的基準は奢侈的享樂の追求あるいは「自己の生活状態の改善」の意欲を容認し、それと調和しうるものでなければならないのである。彼はそのような徳を市民的徳と呼び、習俗が良好であるか否かはこの市民的徳に照らして判断しなければならないとしている。そしてこの市民的徳は「社会の平穩で繁栄した存続と一致しうるあらゆる弛緩を容認する」(Ⅱ, p. 151) から、厳格なものである必要はない。このような「弛緩」は取るに足りないものであり、それによる不都合をはるかに上回る有利を社会にもたらすから、「一時的な有用性しか考慮しないこのような徳は明らかに十分に適切なものである」(Ⅱ, p. 170)。マンデヴィルはリゴリズムの観点からあらゆる奢侈的衝動を悪徳とみなしたため、悪徳が公益を導くという逆説を弄せざるを得なかったし、ムロンは宗教・徳と政治の世界とを分離した上で、もっぱら政治的観点から奢侈の社会的効用を称揚したが、ビュテル・デュモンにとっては奢侈は悪徳であるどころか、逆に徳の主要な規定要因でさえあり、奢侈の社会的効用は新たな市民的徳の源泉であったのである。こうして感覚的享樂の享受によって現世的幸福を求める「消費の自由」は道徳的に完全に容認されることになった。

見てきたように、彼は快樂と苦痛の原理に基づく功利主義的幸福観に立

脚して、幸不幸の基準を物質的富の享受すなわち経済的厚生に求め、経済的厚生をもたらしうるあらゆる技芸の洗練とその享受を奢侈として規定した。功利主義の観点から奢侈をほとんど無条件に人間の幸福と同列視するこのような奢侈の絶対的な規定を前にしては、功利主義の当否を問わないかぎり、いかなる道徳的な奢侈批判もそれ自体としては有効性を失うことは明らかである。しかしコンディヤックとケネーも同じく功利主義の快苦原理に立ちながら、富の再生産の観点から奢侈批判に転じ、快苦原理をいわば屈折させたように<sup>(4)</sup>、問題は感覚的享楽の物質的基礎である富の生産の観点から、「消費の自由」の有効性を問うことである。ビュテル・デュモンはどのような屈折も伴わずに快苦原理からまっすぐに「消費の自由」の観念に至ったが、この観念の経済学的意義こそが問われねばならないのである。それは彼にとっては独自の資本理論に基づいて「消費の自由」の制限を求める重農主義の経済学的な奢侈批判に応えることである。ビュテル・デュモンはこの新たな奢侈批判の流れに抗して、どのようにして「消費の自由」を擁護するのであろうか、この次第の検討がわれわれの次の課題である。

(注) (1) 彼はこのようにあらゆる支出は有益であるとするが、フォルボネのように消費循環の視点から勤労大衆の消費者としての側面に十分に着目し得なかったから、必然的に富者の消費の先導的役割がおもに強調されることになる。

(2) ほかに、奢侈は人口の減少を招くとする伝統的な批判に対して、彼は「奢侈は大勢の家族を維持し、みずからの勤労の見返りにかれらに保証される安楽によって大勢の労働者を結婚するように誘う」(Ⅱ, p. 58) とともに、人口を規定する農業生産は耕作者の生産意欲と農産物需要の点で奢侈に規定されるから、人口もまた奢侈の拡大とともに増加していくと応じている。むしろ彼はシナの例をあげて将来の危機として過剰人口の可能性を指摘している。

(3) ビュテル・デュモンにとって、政治的構成の欠陥などに由来する顕示的消費は奢侈ではない。奢侈はあくまで経済的厚生を高め「自己の生活状態の改善」に資するものでなければならない。この意味では、彼もまた奢侈を境遇の

改善欲求といういわば経済合理性の枠内に取り込もうとしたフォルボネと同じ立場にいる。ただしビュテル・デュモンの場合は、「奢侈とはまったく異なる動機」による顕示的消費も「枯渇した血液を国家に与える」かぎり、政治的観点からは有害ではない。

(4) コンディヤックは快樂と富裕を増進する奢侈の効用を一面では認めつつ、奢侈的欲求が顕示的欲求へと肥大化し、経済秩序の転倒を招いて国民的富裕を損なうことを懸念して、奢侈批判に転じた (*Le Commerce et le gouvernement considérés relativement l'un à l'autre*, 1776)。ケネーに関しては拙稿「ケネーにおける自由の体系」『下関市立大学論集』第40巻、第3号、1997年を参照されたい。

## 2. 重農主義批判

ビュテル・デュモンの重農主義批判はおもにボードーを対象にして行われている。そこで最初にボードーの奢侈規定と資本理論の特質を簡単に整理しておきたい。

周知のように、ケネーは再生産の維持と拡大のためには前払いが安定的に回収されかつ増大するとともに、その生産効率が向上しなければならないと考えた。過小生産を前提に動態論的展望を示した「経済表」以前の諸論稿などでは、この前払いの回収と増大は穀物価格と穀物需要に規定され、それゆえ穀物への大衆的消費に規定されていたが、農業が最高度に発達した理想的経済状態を表示した『経済表』(原表)では、この前払いの回収は社会の需要構造を規定する地主の消費支出のあり方に規定されていた。すなわち収入の両階級への折半支出は単純再生産をもたらし、農産物への支出(「生活資料の奢侈」)が工芸品への支出(「装飾の奢侈」)を上回れば、それだけ前払いは増大し再生産は拡大するが、逆に工芸品への支出が上回れば再生産は縮小するとした。しかしケネーのこの二つの消費論のうち、後者の構想は不妊階級へのどのような支出も最終的には生産階級へ環流するとする重農主義の原則と矛盾するものであったから、やがて「略

表」から「範式」へと『経済表』が完結した社会的再生産過程を表示する表へと洗練され、体系の視点がいわば純化されるとともに、地主の消費支出の動向が直接に農業資本の規模を規定するという「原表」段階の構想は事実上、放棄された。しかし「生活資料の奢侈」と「装飾の奢侈」という地主の消費支出の主導性の議論の枠組みそれ自体は、「原表」段階では見られなかった論拠を示しつつ維持されている。1. 農産物への直接的支出の方が工芸品への支出（農産物への間接的支出）よりも前払いの回収を確実にする、2. 外国産の奢侈品や国内で奢侈品に加工される外国産原料の輸入は、相互貿易の原則によって国産の農産物の輸出をもたらすが、しかしそれは完全な相殺とはならず、取引費用の分だけ前払いの回収を減少させることになる、3. 地主の農産物への支出は最上質の農産物の高価格を支えることでそのほかの農産物の良価を維持する、とする論拠である<sup>(1)</sup>。

これに対し、ボードーは農産物価値を前払いの回収部分とこれを上回る純収入部分とに区別し、前払いの回収部分が維持されるかぎり、純収入部分がどのように消費支出されようとも基本的に再生産の規模には無関係であるとして、ケネーの「原表」段階の構想を明確に否定するとともに、上の論拠のうち1と2をも否定した。純収入からの不生産的支出の向かう対象が国産品であれ外国の奢侈品であれ再生産にどのような影響をも及ぼすものではない、貿易商人などを經由する外国商品の場合はそれだけ経費がかかるから、経費の分だけ「享樂が失われる」という違いがあるにすぎないとするのである。ただし彼は上の3の論拠は支持しており（「消費の豪奢はどこでも主権者と彼らを取り巻く宮廷とに伴うものであるが、それは比較的珍しいかまたは上質の第一級の物産に高値を付けることによって物産の価格を維持する点で、きわめて有効でありうる」<sup>(2)</sup>）、この意味でケネーと同じく「装飾の豪奢」よりも「消費の豪奢」（生活資料の豪奢）の方が有益であるとしている。この点を除けば、再生産の規模は純収入部分からの消費支出に規定されるのではなく、前払いの回収部分の維持と純収入部分からの投資支出の水準のいかんにかかっていた。このような資本理

論に基づいてボードーは奢侈を次のように規定する。「われわれは生産に役立つ支出を損ない、同時に生産そのものを損なって、不生産的支出の総額を増加するような国民的支出の自然的、本質的秩序の転倒を奢侈と呼ぶ」<sup>(3)</sup>。すなわち、みずからの享樂のために前払いの回収部分に手をつけるような支出はなんであれ再生産を損なう奢侈であり、そうでないかぎり、「自由処分可能な」純収入部分がどのように支出されようとも奢侈ではないとするのである<sup>(4)</sup>。

ボードーはこうしてケネーの資本理論から不純な要素を取り除くことでチュルゴやスミスの蓄積論への橋渡しを行ったが、ただし他の点では彼はケネーと同じ重農主義の限界を共有している。「自由処分可能な」純収入の所有者はケネーと同様に地主（および主権者、10分の1税徴収者）に限定されており、耕作者は前払いの回収分と、商業の自由によって土地の賃貸契約期間中に生じた価格騰貴から得た譲渡利潤をもっぱら追加的投資のファンドとして得るにすぎない。したがって、不確かな耕作者の譲渡利潤を除けば、収入の私的な用途に応じて再生産の拡大を左右するのは地主のみであるが、地主は不可侵の所有権の正当な行使として自己の収入をどのような消費支出にも用いることができるから（そのような消費支出はなんであれ奢侈ではない）、再生産の拡大のために消費支出を減らして投資支出を増やすように地主を導くものは、自己利益に関する地主の「自覚」のほかにはない（奢侈取締法によって地主の支出を制約することは所有権の侵害である）。こうして有閑者たる地主に投資者としての役割を期待せざるをえない重農主義の弱点を、彼もまた免れてはいないのである<sup>(5)</sup>。

このようなケネーやボードーの奢侈・消費論を、ビュテル・デュモンは次のように批判する。まず純生産物の価値実現額である純収入からの消費支出のあり方が再生産の規模を左右するという議論を、彼は全面的に否定する。その根拠は一つにはボードーのそれと同じく、耕作に必要な年前払いや原前払いが維持されているかぎり、純収入それ自体からの支出はどこに向けられようとも年再生産を損なうことはありえないということ、今一

つは、地主の不妊階級への支出はこの階級に購買力を与え、農産物への消費需要を増大するからむしろ農業に有利であるというものである（Ⅱ，pp. 37-8）。後者に関連して、彼は「生活資料の奢侈」は上質の農産物の高価格を支えることで農産物全体の良価を維持するから「装飾の奢侈」よりも有利であるとする、ボードーが唯一支持した3の論拠をも明確に否定している。「生活資料の奢侈」によって上質の農産物の消費が増大すれば、それだけより質の劣った、しかしながら全体としてより大きな価値を実現する普通の農産物の消費が減少するから、かえって収入は減少してしまうとするのである。「土地の収入を最大にするものは普通の生産物に向けられた競争である。ところで生活資料の奢侈が消費者の数を減らすのに対して、装飾の奢侈は小規模な消費者の数を無数に増やすことでこうした効果を生み出す」（Ⅰ，p. 177）。彼もまたフォルボネやピントと同じく、不妊階級の消費主体としての意義に着目して重農主義批判の論拠の一つとしたのである。

ビュテル・デュモンは「このような理由によって、かれらは事実上、かれらの当初の主張を放棄」し、ボードーによる新たな奢侈規定が考え出されたとみなしている（Ⅱ，p. 38）。したがって彼の批判のおもな矛先はボードーに向けられることになる。ビュテル・デュモンは、どのような豪奢も前払いを損なわないかぎり奢侈ではないとするボードーの奢侈規定を、一般に受け入れられた観念とはあまりにかけ離れたきわめて奇妙な規定であり、前払いに打撃を与えうる怠惰、手際の悪さ、税、飲酒癖などの多様な諸原因を奢侈として一括するのは概念上の無理があるとし、この意味で奢侈にかかわる「諸観念のもつれをほどこどころかそれらを混乱させる」ばかりであると厳しく批判する（Ⅱ，p. 29）。ボードーは前払いを損なう浪費を奢侈として非難したが、ビュテル・デュモンにとっても、消費支出が経費に食い込めば再生産を阻害することは自明のことであった。既に明らかなように、彼が奢侈の効用を論じるとき問題とするのは、前払いを損なう浪費ではなくて、生産物価値と前払いとの差額として生じる「自

由処分可能な」純収入の使途である<sup>(6)</sup>。ミラボーは『農業哲学』において、100人の住民のうち50人が耕作に従事し、残りの50人が農業生産に必要なものを生産しているときに、この残りの50人のうち30人が無為な仕事に就けば収穫は減少してしまうとしたが、ビュテル・デュモンは問題の本質を捉えるためには、そのような自明なことに着目するのではなく、100人のうち50人が耕作に従事し30人が耕作に必要なものの生産に従事することで100人を養う場合、残りの20人がどのような職に就こうとも再生産は損なわれないこと、むしろこの20人がなんでもあれ享樂をもたらす技芸に従事すれば、住民の厚生が増大することにこそ着目すべきであるという（II, pp. 66-9）。

この純収入の使途に関して、その所有者が消費支出を削減して土地への投資を増やすことを求めるボードーの議論に対しては、彼は次のように反論する。1. 土地と土地改良のための資力とを同時に所有する者など全体の50分の1もないから、ボードーの議論はこれらの人々に限定された特殊な命題にすぎない。2. 納税という公的義務を果たしているかぎり、みずからの収入をどのように支出するかはまったく個人の自由である。3. 純収入のうち投資に向けるべき部分と個人的な消費に用いる部分とを「義務の範囲」として正確に示すことはできない、「このような義務は事物の自然には属さず、それを強制しようとすることは不合理である」。4. そもそも土地所有者が土地の改良に専心するかどうかはそれほど重要ではない、なぜなら大勢の人々が利益を求めて彼の代わりに土地の改良と耕作のために集まってくるからである。奢侈的享樂の魅力はその享受のための資力を獲得すべく人々を駆り立てるから、「かれらは一緒になって、かれらが蓄えた資金をなんらかの利潤の期待を示すものすべてに投資する、…利益はその運用のために必要な富を見いだす術を知っている」。こうして「奢侈の生み出す競争心が…怠慢あるいは不器用な所有者の代わりに投資する」人々をおのずから引き寄せるのである（II, pp. 91-5）。ボードーはケネーとともに地主が収入を投資に向けるためにかれらの知性



的な自覚に期待したが、ビュテル・デュモンはそれを地主の義務と読みかえ、そのような義務を地主に課すことは支出の自由に反するという。「自覚」であれ「義務」であれ、どちらの場合も、本来的には有閑者である地主の投資行動は直接的な利潤動機の結果とはみなされていない点では同じであるが、それでもボードーが重農主義の原則的立場から地主による農業投資の増大に期待せざるをえなかったのに対して、ビュテル・デュモンには地主に投資者としての役割を期待する格別の理由はなにもない。投資行動はむしろ利潤動機に導かれて、蓄えた資金の投資先を常に探し求める生産者（耕作者）の領分として措定されているのである。

このような認識が彼の次の言説と一体のものであることは明らかである。「純生産物に基づいて生産階級に支払われた支出は、耕作者がそれらを享楽のための消費に用いないで、新たな耕作に向けるかぎりで生産のためになりうる。純生産物に基づいて不妊階級に対して行われた支出も同じく、同様に節約され充用されれば、同じ効果を持つであろう。したがって、前者の支出と後者の支出とで再生産に関していかなる違いもない」（Ⅰ, pp. 176-7）。ここには耕作者の手元に前払いの回収分を越える剰余がもたらされ、この剰余の一部が制欲の結果として投資（「新たな耕作」）に向けられるときに生産の拡大が可能となること、しかも同じことは不妊階級とされる人々にも当てはまることが簡明に示されている。また彼はより一般的に、課税が平等でよく秩序立てられた政府の下では、納税の後に「臣民の大部分の手に」生活の必要を満たして後に剰余が生じるが、「この部分は奢侈として消費されるか、もしくは最終的に奢侈として消費すべきより大きな剰余を手に入れるために収入の改善に用いられる」（Ⅱ, p. 56）と述べている。必要を越える剰余は直接に消費欲求を満たすために用いられるか、もしくは将来のより大きな欲求の充足を目指して「収入の改善」のために投資されるかのどちらかであり、「生活状態の改善」の意欲は人間の本源的欲求であるから、剰余を手元に残す「臣民の大部分」は誰であれ投資の主体となりうるのである。ビュテル・デュモンは階級構成論や分

配論をそれ自体として論じてはいないから、この剰余がどのようにして発生し分配されるかは不明であり、経済学的には素朴な表現にとどまっているといわざるをえない。しかし彼はこのような認識によって、フォルボネやピントやコンディヤックの重農主義批判の水準を越えるとともに<sup>(7)</sup>、ボードーの限界をも易々と乗り越えているように思える。

ところで、このように資金を蓄えた生産者に投資機会を与え、あるいは一般に労働と生産を刺激する誘因はなんであろうか。彼にとって、その誘因は「なんらかの利潤の期待を与える」社会的需要であり、この社会的需要の源泉は政府による支出と人々の個人的な消費需要である。耕作者が必要を上回る剰余を持ちながら販路を持たないとき、「政府が社会に援助の手を差し伸べる。政府は多くの腕を必要とし大勢の有用な消費者を生み出す公共事業に着手する」。しかしながらこれらの「運河、道路、要塞、建造物、公共施設」などの建設事業には限界があると彼はいう。これらの事業を遂行するための徴税は必要最小限でないと、これらの事業は人々の競争心を刺激するどころかかえって競争心を妨げてしまうから、この時点で事業の規模（有効需要の創出）にはおのずから制約があるし、また「国家の事業による刺激はこれらの事業の達成とともに停止してしまう」からである。したがって「もしほかの原動力が活動を維持しなければ、国家の進歩はそれがどれほど遠くにまで至ることが可能であっても、常に停滞してしまう」であろう（I, pp. 36-9）。「ほかの原動力」とは人為的な欲求に基づく個々人の奢侈的な消費需要にほかならない。「それにより販路が限りなく開かれたから、技芸は制限なく帝国の繁栄を究極的なところまで導く機会を労働に与えた」のである（I, p. 40）。

剰余を蓄えて投資に向ける動機は「収入の改善」によるより大きな快樂の享受であり、そのような投資行動に機会を与える主な誘因もまた個々人の可処分所得からの奢侈的な消費需要である。しばらく後に、前者の論点を共有するスミスは、後者の論点に関しては販路説的な展望の下で資本蓄積による生産の自己増殖の可能性を示したが、このような展望とは無縁の

ビュテル・デュモンにとっては、投資機会はおもに個人的な奢侈的消費によって与えられねばならない<sup>(8)</sup>。ボードーに至ってケネーに見られた消費主導論は影をひそめ、重農主義の体系において生産に対する消費の規定性は大きく後退することになったが、ビュテル・デュモンはこの学派の投資理論の批判的検討の上で、依然として消費欲求・支出の経済的機能を重視したのである。

(注) (1) Quesnay, “Analyse de la formule arithmétique de Tableau économique,” 1766, *François Quesnay et la Physiocratie*, INED, 1958, II, pp. 802-3 (坂田太郎訳『ケネー「経済表」』春秋社, 昭和31年, 145-6頁)。

(2) Baudeau, “Du faste public et privée,” 1767, *Principes de la science morale et politique sur le lux et les loix somptuaires*, éd. par A. Dubois, 1912, p. 28.

(3) Baudeau, “Du luxe et des loix somptuaires,” 1767, *ibid.*, p. 14. なおボードーおよび重農学派の奢侈論に関して、渡辺輝雄『「奢侈」ならびに『豪奢』にかんするボードーの二つの論文』『東京経大会誌』第73号(1971年)が詳細な分析を行っている(この渡辺論文には『市民日誌』に掲載されたボードーのこれら二論文の邦訳が含まれている)。

(4) ボードーはこのような奢侈規定に基づいて、ケネーのいう「生活資料の奢侈」と「装飾の奢侈」を「消費の豪奢」と「装飾の豪奢」に言い換えた。言うまでもなく、彼にとって「豪奢」は「奢侈」ではない。

(5) これに対しチュルゴは、1. どの部門であれ企業者は資本の回収分を上回る利潤を獲得する、2. この利潤は経費の一部として価格のなかに予め組み込まれている、3. 資本の形成はこの利潤の節約(蓄積)によって可能となるとした上で、資本形成の担い手を地主ではなく企業者利潤を節約し投資する諸階級の企業者に求める。チュルゴのいう企業者利潤は、同じ資本を土地の購入に用いれば苦勞もリスクもなく獲得し得たはずの利益と経営的利得の合計であり、専ら投下資本額の大きさに規定されるスミスの資本利潤とは異なっている。また彼は一方で重農主義の原則に従って、農産物のみを富として規定し、純生産物は「自然の贈り物」として農業部門にのみ生じると考えたから、企業者利潤も一面ではこの純生産物の企業者による分有として捉えられている。彼

は重農主義的な制約を完全には脱却していなかったが、しかし彼の資本理論は重農主義の枠内でその理論的可能性を極限にまで押し進めるとともに、その限界点において事実上、重農主義の体系の論理を掘り崩し、スミス蓄積論の扉を開くものであったことは明らかである（A. R. J. Turgot, *Réflexions sur la formation et la distribution des richesses*, 1766）。チュルゴの *Réflexions* は1769年から70年にかけて『市民日誌』に3回に分けて発表された。以下にみるビュテル・デュモンの重農主義批判にはチュルゴの議論とのいくつかの類似点を見いだすことができる。71年の『奢侈論』に *Réflexions* が影響を及ぼし得たかどうかは不明であるが、内容の点からもその可能性は薄いように思える。

(6) もっとも彼は耕作者による前払いの浪費それ自体、「用意周到で勤勉な人々が大量の大国では」懸念するには及ばないとする。1. 耕作者の相対的多数が前払いを損なう浪費に身を任せると想定することは「非現実的」であること、2. 「このようにして少数の乱れた耕作者の手から出た資力は即座に彼らに取って代わる別の人々の手に渡る、利益というこの重要な動因がこうした成りゆきを保証する」こと、3. さらに耕作者の享楽への嗜好は市民の他の階層にも同じ嗜好が普及していることを示すものであるが、このような享楽の嗜好の一般的な普及は必然的に人々の労働意欲を高め、繁栄を導くから、「その結果は若干の個人の乱行の結果を埋め合わせる」こと、それゆえ「ある耕作者の不品行は彼の破滅をもたらすが、この場合、彼の破滅を引き起こす諸原因の結合により国家はダメージを受けない」などと、彼はその理由を説明している（II, pp. 34-5）。

(7) コンディヤックは効用価値説に基づいてケネーとは異なる立場から経済科学を再構成しようとしたが、そのことは費用分析の視点を弱め、生産理論の水準をカンティロンレベルに引き戻すことになった。彼の重農主義批判はケネーの資本-生産理論の批判的検討を欠いており、それゆえ内在的な批判にはなりえていない（Condillac, *op. cit.*）。フォルボネとピントについては以下の拙稿を参照されたい。「フォルボネにおける奢侈と消費」『下関市立大学論集』第39巻第1号、1995年、「奢侈と節約——イザック・ド・ピントの奢侈批判を中心に——」『下関市立大学論集』第39巻第2・3合併号、1996年。

(8) スミスが資本家による資本蓄積の観点から税を必要最小限まで軽減することを求めたのに対し、ビュテル・デュモンは個人的な消費需要の観点から同じことを求めている。

### 3. 結び

18世紀の奢侈擁護論が、利己的情念の社会的効用に着目した17世紀後半のモラリストやジャンセニストなどが築いた知的伝統の延長上にあることは明らかである。人間は本来的に利己的存在であり、しかもその利己的情念の自由は様々な社会的、経済的機能を発揮し、人間の社会的結合と社会の繁栄を導く。ビュテル・デュモンは、奢侈の社会的効用を根拠とするこのような奢侈擁護論に快苦原理に基づく功利主義的基盤を与えたといえる。見てきたように、彼は絶対的な必要を越えるあらゆる技芸の洗練を奢侈とみなし、人間の幸福はこの技芸の洗練による感覚的享樂の享受に存すること、そのことは国民的レベルでも妥当するから政治の目的は国民に感覚的享樂の物質的基礎をより多く与えることにあると考えた。またそのような「自己の生活状態の改善」の意欲は人間の本源的欲求であるとしたから、彼には奢侈を求めることそれ自体が、奢侈が社会的に有用であるか否かを問う以前に、本来的に正当な自己実現の行為であった。彼の絶対的な奢侈規定からすれば、どのような道徳的な奢侈批判も無効であり本末転倒であって、道徳的な価値基準はむしろ奢侈を求める人間の本源的欲求を容認し、それと調和しうるものでなければならない。このように彼は消費欲求の充足を求める功利的人間の唯物的な情念の自由それ自体を正当なものと容認した上で、さらに「消費の自由」は社会的、経済的な様々なメリットをもたらしうることを論証しようとする。それはマンデヴィル、ムロン、フォルボネなどが示した奢侈擁護の基本的論拠を踏襲するものであったが、しかし彼が重農学派的な経済学的な新たな奢侈批判に抗して、一貫して奢侈的欲求・消費の意義を強調したことは注目に値する。彼はこの新たな流れを理論的に吟味し、投資者に投資意欲と投資機会を与える誘因はおもに個々人の人為的欲求とこれに基づく消費需要であるとして、変わらず奢侈的欲求・消費の意義を力説するのである。彼はこれらの哲学的、道徳

的、経済学的観点から奢侈に対する法的、道徳的規制に反対し、さらに税が個人々の消費ファンドを損なうことを厳しく戒めた。このような「消費の自由」はこれまで注目されることのなかった自由主義の重要な一側面であると考えられるが、ビュテル・デュモンに至って、奢侈的消費の自由はほとんど無条件の是認を与えられることになったのである。

奢侈擁護論は消費主導論と結合し、富者の消費であれ大衆の消費であれ生産に対する消費の規定性を一論拠としたが、このような消費支出の意義を一意的に強調する論理は重農主義以降の資本理論の形成とともに相対化されていき、とりわけチュルゴとスミスの制欲による節約（資本蓄積）の論理によって奢侈批判の新たな軌道が確立されることは、われわれがかつて見た通りである。しかしこの論理が販路説的展望を前提にするかぎり、消費の規定性の論理はその有効性を失うわけではない。これ以降、過剰蓄積による過剰生産の可能性に着目して、有効需要の視点から消費欲求に導かれた消費需要の意義を強調する理論的系譜が学説史上の伏流として継続されていくことは周知のところであるが、ビュテル・デュモンの消費主導論がそのような流れを先取りするものであったことは明らかであろう。他方、マンデヴィル以降の奢侈擁護論はマンデヴィルの逆説を排して奢侈的衝動に含まれる顕示性などの非合理的要素を排除し、奢侈的欲求を境遇の改善欲求として合理化することで道徳的非難をかわすとともに、物質的富の享受を境遇の改善として称揚することで富裕の科学としての経済学の形成を導く一要因となったが、この点で、顕示的消費を「奢侈ではない」としたビュテル・デュモンもまた同じ立場にいることは明らかである。彼はさらにこのような合理化に功利主義の哲学的根拠を与えることで、19世紀以降の経済思想の展開を先取りすることにもなった。

しかし彼は功利主義の観点から「国民はそれを構成する諸個人が…より多くの便宜や満足や快樂を持つに依じて、…幸福である」としながら、国民的富裕の構想を描ききれない。彼は富裕の条件にかかわる経済理論のレベルでは、おもに富者の消費支出の先導的役割を強調し、消費者としてのの

富者と技芸の担い手たる生産者としての貧者への分裂を前提にせざるをえないからである<sup>(1)</sup>。このような富者の経済的意義の重視は、絶対的な奢侈規定と相まって、富者の豪奢にほとんど無条件の是認を与えることになる。しかし彼みずから「われわれが富者の支出を目の当たりにするとき、それを厳しい目で見ないようにするのはなかなか難しい」(Ⅱ, p. 128) というように、このような是認は必ずしも人々の常識的な道德感覚と相容れるものではない。ビュテル・デュモンの「消費の自由」の観念は、どのような正当化によっても、分配にかかわる倫理的問題をけっして逃れ得ないのである<sup>(2)</sup>。19世紀の末に、労働と生産を導く人間の心理的動機の重要性に着目して改めて奢侈の効用を論じたルロワ・ボーリユーは、「富の不平等は最も強力な生産の刺激ではないだろうか、そこにより深刻な問題がある」と指摘したが<sup>(3)</sup>、われわれはビュテル・デュモンの言説にそのような問題性の自覚を読みとることができよう。

人間の利己的欲求の経済的機能に着目する奢侈擁護論は、生産に対する消費の規定性と人間の心理的動機の重要性を析出することで、近代社会の経済的な構成原理の一特質を見事にあぶりだした。われわれはビュテル・デュモンの「消費の自由」の観念にその最も直截な表現を見いだすことができたが、それはまた利己的な消費欲求を一動因とするこの経済社会のはらむ問題性をも、同時に浮き彫りにするものであったといえよう。

(注) (1) 彼はいう、「国家には貧者と富者がいなければならない。社会の至福はかれらの共存、かれらの協働に依存している」(Ⅱ, p. 129)。ただしこのような不平等はあくまで人間の性格や能力の違いに基づくものでなければならないし、またマンデヴィルのように怠惰による自発的失業を懸念して生産者の貧困が求められているわけではない。しかしそれにしても、消費循環の視点から勤労大衆の消費力に着目して奢侈の機能をおもにこの勤労大衆に求め、さらに機会の平等を通じて不平等が流動化する可能性を指摘したフォルボネに比べれば、ビュテル・デュモンにおける国民的富裕の観念の屈折は明らかである。

(2) この後、アベ・プリュケ (Abbé Pluquet, 1716-1790) は過度の不平等を前提にする奢侈の容認は一方での貧困の蓄積を容認することで様々な社会的な

不利益をも容認することになるとして、長大な奢侈批判を展開し (*Traité philosophique et politique sur le luxe*, 2vols, 1786), また既に述べたように、コンディヤックも『商業と統治』(1776年)において、ビュテル・デュモンと同じ功利主義の観点に立ちながら、しかし虚栄心が生み出す流行の気紛れに従う「首都の奢侈は貧困と荒廃の原因であることはあまりに真実である」(Condillac, *Œuvres Complètes*, éd. par A. F. Théry, 1970, IV, p. 357)として、むしろ「質朴な生活」への回帰を唱え、文明批判の傾きにおいて奢侈を批判した。

(3) P. Leroy-Beaulieu, “Le luxe, la fonction de la richesse”, *Revue des Deux-Mondes*, 1<sup>er</sup> novembre 1894, p. 77. 勤労意欲と生産の誘因の観点から奢侈の社会的効用を称揚し、道徳的、政治的、経済学的奢侈批判に反論するルロワ・ボーリユーの奢侈論は、18世紀の奢侈擁護論のほとんど焼き直しにすぎない。ただ奢侈的生活は(過度の)人口増加を抑制する効果を持つとされ、マルサス以前においてはむしろ多人口主義の観点から奢侈批判の論拠の一つであったものが奢侈擁護論の論拠にすりかわっている点は興味深い。いずれにせよ、ルロワ・ボーリユーが「経済学は富の生産に専念する人間の諸動機にかかわる科学」であるとしたA・マーシャルに同調しつつ、奢侈的願望を満たそうとする努力は「人間の生産力を大いに高める」として、19世紀末の時点で改めて労働と生産を導く人間の心理的諸動機に着目したことは注目に値する。